



失口神靈
感得奇聞
新田義統切臣錄一

205
1



八 13
205
170

白序

多端哉教育之方也。北隣之教子

弟。朝夕戒之曰。善。無小。而為。天

其社。汝不善。無小。而為。予。則

擯。汝皆。栗。而唯。苟免。鞭。扑。月。

南。家。則。厲。其。子。姪。為。之。諄。諄。語。

古今曰。善。善。之。祥。也。如。某。子。不。善。

之。殃。也。如。某。氏。皆。怡。而。諾。勸。

善。如。躍。如。也。二。將。欲。其。子。之。善。也。

於
205
170

東
學

民國三年十月十日
于鏡湖
...



德壽丸

一卷奇書勲業有
振復讐得志智謀
不辱

豈異乎哉或招心或革面
非寬之得猛之失也沃心非不
沃也今筆南公將之一語以
授而童尚亦其躍也如也
文化丙寅孟春題於東都
城西獨醒書屋

歡醜閒士



醉墨公逸錄



時化可就類
何接和化之
羨旋程安
久孤忠骨
旋表六
階八又



由良義忠

心懷意馬
一身萬變榮
華辭枝舊
巢何戀



玉琴

凶世流世
願結善果
無不
豐



水瀬義虎

武野躰賊
量運窺時君
臣奇遇有天
助之驍勇誰
戰當在義兒



新田義統功臣錄初編目錄

○卷之一

第一編

義興現靈矢口津話
幼主經難締許字話

第二編

靈狐謝恩示禍福話
惠仲客路得好述話

○卷之二

第三編

黑夜失途會旧臣話
追鳥化城援鮓婦話

第四編

君臣奇遇議復讐話
惠仲一時遭災禍話

○卷之三

第五編

禪可摘醫索黃金話
孝女賣身救父親話

第六編

主計花下戲笑人話
惡醫飼女觸癡漢話

○卷之四

第七編

求馬感冥助做婚話
冤靈變生為天宗話

第八編

夫婦祈佛愛攘怪話
了庵貪欲縊息渚話

○卷之五

第九編

公子奉勅歸東州話
客路遭難得肱股話

第十編

貞兒代嫁助賢夫話
沈阿全愈遭異人話

以上 最編 五卷

後編 五卷

當寅冬出版



義興現靈文口津話

幼主經難締許字話

南朝の正平十四年新田九兵衛佐義興公越前國に在るを東國の
人々招く真頼公を則日及武藏國へ来りたり其處に日河を遣て
左祖中々們少が既其勢崩人とも遠事途くも録念其國へても
管領足利九馬頭基氏朝臣大志を執事畠山入道道振と計り密に
竹澤監物江戸遠江守等とて反間の計を將く義興公を欺き夫の
津に於て殺せり是は是近新田中志を通り堂をむすべし門も憑り
大將亡めしは一人の義興公を離れぬ茲に不承にて東國へ歸り
所其義興公の寛靈雷とてあり江戶兄弟を震し其怒教とてあり

足利家臣
惣仕
の圖

會大集各惠各之

長三

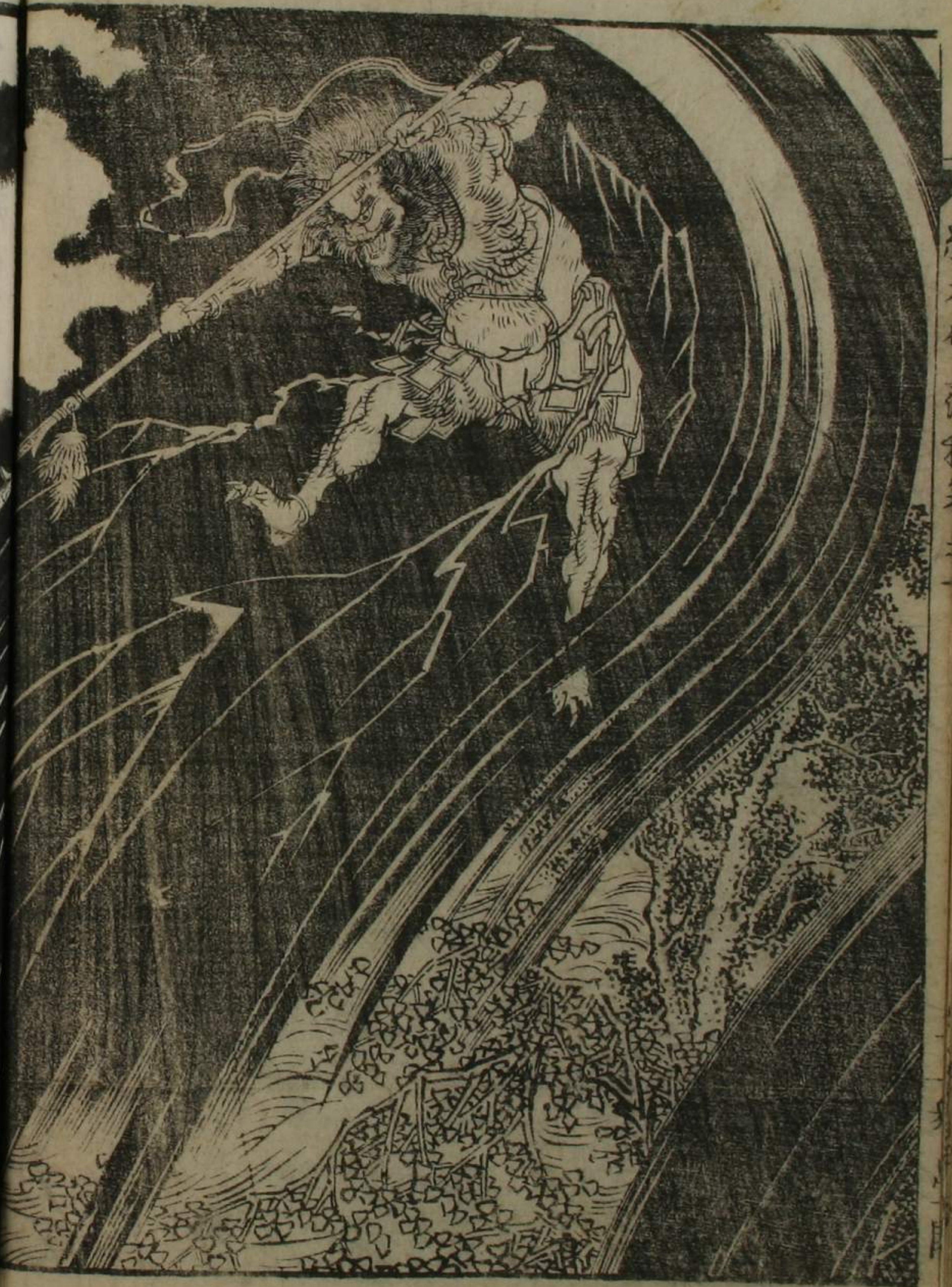


其地方をさらりて録倉するも妖宗を倣ふこと世にさし武相西國の人民
 大に怖懼する其氏朝臣是を患ひ意甚易かき再世臣の徒を召く此
 軍の過る宜少きと評儀區となり尚討班部の中より細川右馬頭頼之
 進に出くわへらく臣懇愚意を乞ひて量事近日の恠異不固人の甚動て
 新田氏を想ひ意頗ちり若此虚に憑く新田の氏族東は其真起者ゆへ
 忽ち其左祖する們多制する術ふく人尚初南朝の亡臣新田楠の冤靈
 天下に妖宗を倣ふしを御父の氏公是の爲に夢窓國師を命て天龍寺
 を造立りしは天變地妖教消亡臣等の子弟其仁惠に屈伏して天下
 靜澄なりき今日其倣く文口の邊に義興の靈を神と崇め四時常
 且一面に刑罰を釈し恩賞を寛税賦を減して大赦をおこなふ妖宗
 かのばうらきと人仁徳を感佩し新田に左祖する者なるべしと理を重
 しと陳めたりは其甚感(或は)やうて武藏の知縣(今)すくをのふ
 義興靈神の廟を矢口の津に造営當時道德の名はる僧を請じ眞
 福をのみま倉原を仰ぎ寃民を賑(只)能仁政を施(ふ)る人(は)も甚
 かまらる妖宗も消教(東國)の民其仁惠に伏せ昇平を唱たり説遠
 新田の世臣由良兵司義忠叫做的り生得骨秀齊力人其過る忠良
 の豪傑もく當初故義貞公に三男兒在る中其義興公も賤妾の子
 なりしそ兄越後も義顯没後も義貞公是を家嫡に倣ふるに男
 武藏守義宗御を二歳の時より昇殿させしやまきさるる義貞公の
 あるもつと上毛國に潛く在るを故奥州の國司頼家御録倉
 へ責する時遠兵司義貞公を大將と倣武藏上毛の國人新田に志し徒
 を倣し三方の兵を將し頼家御に力を合し録倉を斃し南山へ逃たり

其地方をさらりて録倉するも妖宗を倣ふこと世にさし武相西國の人民
 大に怖懼する其氏朝臣是を患ひ意甚易かき再世臣の徒を召く此
 軍の過る宜少きと評儀區となり尚討班部の中より細川右馬頭頼之
 進に出くわへらく臣懇愚意を乞ひて量事近日の恠異不固人の甚動て
 新田氏を想ひ意頗ちり若此虚に憑く新田の氏族東は其真起者ゆへ
 忽ち其左祖する們多制する術ふく人尚初南朝の亡臣新田楠の冤靈
 天下に妖宗を倣ふしを御父の氏公是の爲に夢窓國師を命て天龍寺
 を造立りしは天變地妖教消亡臣等の子弟其仁惠に屈伏して天下
 靜澄なりき今日其倣く文口の邊に義興の靈を神と崇め四時常
 且一面に刑罰を釈し恩賞を寛税賦を減して大赦をおこなふ妖宗
 かのばうらきと人仁徳を感佩し新田に左祖する者なるべしと理を重
 しと陳めたりは其甚感(或は)やうて武藏の知縣(今)すくをのふ
 義興靈神の廟を矢口の津に造営當時道德の名はる僧を請じ眞
 福をのみま倉原を仰ぎ寃民を賑(只)能仁政を施(ふ)る人(は)も甚
 かまらる妖宗も消教(東國)の民其仁惠に伏せ昇平を唱たり説遠
 新田の世臣由良兵司義忠叫做的り生得骨秀齊力人其過る忠良
 の豪傑もく當初故義貞公に三男兒在る中其義興公も賤妾の子
 なりしそ兄越後も義顯没後も義貞公是を家嫡に倣ふるに男
 武藏守義宗御を二歳の時より昇殿させしやまきさるる義貞公の
 あるもつと上毛國に潛く在るを故奥州の國司頼家御録倉
 へ責する時遠兵司義貞公を大將と倣武藏上毛の國人新田に志し徒
 を倣し三方の兵を將し頼家御に力を合し録倉を斃し南山へ逃たり



義貞の
 靈江
 祝弟と
 七



一は先帝勲覽ありて將帥の畧なりとて在兵衛佐母任しぬぬか
 已し后と武威海内を裏き執旭の出るが如くは人ぬ是都此義忠の力なり
 然る母君矢口屋命の時に其弟兵庫介を従じりて武勇の勇を
 軍食の事を司る君既母失命の敵這地又へ寄ぬ軍を
 大母且怒君ぬ何なる存命なるを如此残痴の們母期に亡ぬひもを
 吾負生何の樂と有ん君と俱お泉下の鬼と句川に此怨と報じしと
 既母我没は準備をぬりしに茲に義興公小衛内在なり字と徳孝
 九と稱を骨秀眉清く皎然とて王の如き容貌なるは生質聰明
 伶俐を以て義興公も甚愛せしめ氏族世臣の們も其敏なるを稱し
 兵司の妻に言君の乳母なりとて殊更母愛優恤かしはるる處母料や
 今回の大故も遭く血属世臣の們或は戦没する敵救す誰小衛内

を養育し去君の能を報多き者なきを想ふ志を轉し必急事と俱再
 徳孝母を誘ひ奉国新田に趣んとかしことをけしき正するに當時鎌倉
 より上勢を上毛に馳赴向山小岳を以て新田の餘属を捜索して街
 の風を録くと聞へし上毛に上毛も往來を得ず止むわくぬぬ
 貞烈の力も甚た近き州令に于蘭沿の承と其も微風も只捕騎と路
 邊の踏も記拭百折千磨を經く漸下徳の願すも逃さる敵は世國
 まで捕兵を迎ざりしを先六七の意を易んじたり往相馬郡小
 金の原も後過る素此郡原と奥羽街第一の度野はしく怪敷なる
 往く白日といへども人を惱まを極悪の評なり此日既母天色晴き
 兵司小衛内の身を推乃と渾家をも勸尚路を以てき行きたるに里はるる
 遠五前面を登りて五里とわづらく火の光見えたるを彼五里と宿を索



兵司
僅事丸と
下橋
止者す

會下集者東の光也

繪本卷之三

七景圖

を多説交相するまゝと書と徳壽丸の模様を着一着の年齢は十二三
 左側はく容親皎然なる玉の如き好男兒なる人清和の昆裔新田の
 嫡子と聞か裡甚佳し想らく此兒をそと吾女婿と做まざらば又なき好述
 ならぬと満面生春色好く過ひ厚く食皆く此家母柱しむるは庄浦
 丹二人の女兒あり一女を玉琴と叫幸既五十一女沈奥落雁の容閑月羞花は
 親あり都も少ある容色なる國哥糸竹の道賢かりけまも其性輕
 深且く繁花を慕流涕を厭ふなり然も女親双全なるは其
 容色もめで是を称する二女を横笛とて幸丸女末切なるも八九
 の姿色りりか一對の玉の如き女兒をそとけり父母も只宝珠の如く
 富貴雙全女親俱備する婿を擇詩親をやと想ふ折らら今回徳
 壽丸を着て我婿と做とも取魚とす夫婦相識して共司ふかく語
 ち多喜のくまらく此事吾門の望と云はれりといふも即君の心を何
 やまを業のりんと急き徳壽丸と渾家と此女を説話すまと言はれ
 論も及ぶ肯りむとち庄浦夫婦相見く云老翁の命を即君
 日諭し糸也と度異儀なく森く肯りいふもむとやく納采を以て
 信を固めしめと説を聞夫婦喜く既其事を整人と高議を做る
 一家同居し此女をさきと是戲を做り似きり婿人の大礼なり
 正しく整人不如と近き所も良室屋なりを贖得く主従二人は
 搬住る后吉月良辰を擇ひ徳壽丸より玉琴の許へ納采を増しむと兩
 家之きむむ血属隣伍の們を招き大きむ宴をとりて祝しむ

靈狐謝恩示禍福話

惠仲客路得好述話

説話徳壽丸主従と在浦の好意ありて此地方より往來牧牛を
 しするに共司熟く徳壽丸の行状を著るに今好意都々縣住此牛を
 牽らばはらひ仮初の戯をば玉ふも只顧軍陳をばひ自大将と成て
 果を指揮し之を光景と自將帥の器顕然とんむ之を喜び想らく雲
 百明の玉六泥中み投うちも潔く今が賤しき中みちるせも流石と清和
 の嫡家きる明以ちちび生育みひく後の父祖も増は英雄の君と成
 るまのひ易く悪家を懲したるふらめど此候も打過ちも文武兼依
 ず権實策畧も疎しく天下の元師となり玉らん京難かる多しと良師
 を擇みく文を学むを糸とせ吾亦武藝を教演むやと是より日く武藝を
 做り一面もく文學の師をぞ索ちり且一醫有り字惠仲と叫做ぬ其身
 浴陽みはま傷をふく業と做其性温厚はく文雅の女も富め早く父を
 亡一人の母を持し是事はく至孝なりし其母屢症手耳噴らざはは
 病瘵の爲み行歩せりなく常も悩まらる患仲はくあまを患ひく想らく
 親有病飲薬不先嘗之是其藥劑を分ん爲はく古人親のそのへ醫
 を識し我親を持あぐり醫道も疎く親をくはく疾も苦はくはく是を
 きるれ道を失ふと是より之の憤念日夜醫徑も眼をさし勢くあまを
 流さるも素より博學英才也と期集りてはく仲景より東垣等
 未法も至るはく妻理を究むるに京ははくあまはく當世の醫も
 看らみ其甚廉士也く古人の書いさうも知らなく只雜法國家
 記さる書も憑く治療を施せらる其危事恰も春氷の上を渡る如く
 是より母の病瘵を辨へて備醫も未だを懸懐し春氷汗まら乃
 思ひを做し自故人精論の法も困る茶劑と是をこく母も勸ちり

正是孝公の信をりて製する薬がらまを天も感下玉のりや日か
 漸々として健旺天質の弱症を人健むなりまを母子俱に喜びを徹する
 如く後おのぼるる醫名四才を剛へ調治を乞ふ者少くまを日か
 奇疾難疾を療するも亦小愈して愈るふ其病家謝儀を送ると
 ともつづのよき朱品の價と母を養ひの資とを取る残まを乞ふ却る良困
 の們めを以てこれ謝儀をも受む只施薬せうば人益長を信託神の
 ぶくも稱し其名近國也蔭志うる一昨夜惠仲燈火の下に夜學
 するもの更とまほしき時村中村人まゝ叫門を乞ひの旨惠仲怪
 をとら立土門扉を開きまをを見らま監二句左側れ老翁面觀渾
 く毛髮未白く白く眼を射る如くなり惠仲此光景を着く甚し
 あり先這裡へ来りてと堂に伴座せしめて乞翁へ何處のへし何
 事ありて来りてや翁は以て批言は是洛陽福荷山の下に住める者
 痛み苦みは四才の醫を治療を乞ふといへも更其驗なく漸々
 了今へ行歩する易かきと申す近頃君の醫術神なるを耳夜を
 来りて君を煩ふんとす願くは憐れをまはして治療を授け
 と辞を果く禮を厚く乞ふるも素より仁慈の惠仲は且一を乞ふ
 を清きまをを憐れ異儀なりけりやや仰向固也腹候は後寸脈
 を診する一盞茶時大少愕然していえく夫脈は五臟六腑に通其
 虚實悉頭素病も臟腑より發する者なりを脈と病を勘察まこれ
 古人の教なり我ちも亦より是れ多くの人を療する一人として
 心は恠哉今翁を診脈する一膳一膳を賜ふは是の間也
 す柝何等の鬼を征實招魂を藥劑を與へん若謹むるを鏡し

正是孝公の信をりて製する薬がらまを天も感下玉のりや日か
 漸々として健旺天質の弱症を人健むなりまを母子俱に喜びを徹する
 如く後おのぼるる醫名四才を剛へ調治を乞ふ者少くまを日か
 奇疾難疾を療するも亦小愈して愈るふ其病家謝儀を送ると
 ともつづのよき朱品の價と母を養ひの資とを取る残まを乞ふ却る良困
 の們めを以てこれ謝儀をも受む只施薬せうば人益長を信託神の
 ぶくも稱し其名近國也蔭志うる一昨夜惠仲燈火の下に夜學
 するもの更とまほしき時村中村人まゝ叫門を乞ひの旨惠仲怪
 をとら立土門扉を開きまをを見らま監二句左側れ老翁面觀渾
 く毛髮未白く白く眼を射る如くなり惠仲此光景を着く甚し
 あり先這裡へ来りてと堂に伴座せしめて乞翁へ何處のへし何
 事ありて来りてや翁は以て批言は是洛陽福荷山の下に住める者
 痛み苦みは四才の醫を治療を乞ふといへも更其驗なく漸々
 了今へ行歩する易かきと申す近頃君の醫術神なるを耳夜を
 来りて君を煩ふんとす願くは憐れをまはして治療を授け
 と辞を果く禮を厚く乞ふるも素より仁慈の惠仲は且一を乞ふ
 を清きまをを憐れ異儀なりけりやや仰向固也腹候は後寸脈
 を診する一盞茶時大少愕然していえく夫脈は五臟六腑に通其
 虚實悉頭素病も臟腑より發する者なりを脈と病を勘察まこれ
 古人の教なり我ちも亦より是れ多くの人を療する一人として
 心は恠哉今翁を診脈する一膳一膳を賜ふは是の間也
 す柝何等の鬼を征實招魂を藥劑を與へん若謹むるを鏡し



責る世と病候を流し嗚呼恥哉君と是當世の神醫なり診察示の如く
 翁と素人同母ならず稲荷山母住の白狐なり既年五百歳を經く神
 通じ物とし自在なるをば故母神海神勅く百餘の眷屬と部下
 と傲しひ是を教育せる大任母しと翁此為母心神を傍終母病を
 出し自療治を施すも之も不愈故母同母出く治を常の母庸醫
 母しと却く病を増處母君が芳名神も走逐しし母母後母空母
 化し未く治を乞ふ一脈母しと人間をらざるを察しあむそくは是
 古の呂祖師母も芳名を母と深く感佩しと治療を需む
 惠母が以母吾不肖なりといふも謹む古人の教を母とる故母病が如
 きも脈を母知しり同道仲景師様を療せし事有り吾其法母同く
 治を施さんと藥劑を制しあむとる翁感謝しと去是より夜毎り
 来り治療を乞ふる二旬ばりを經く病全く愈き母と一夜来り是
 を謝し感佩しと以らる翁人母非ざるを徳母報ふべきとのば故母神通を
 母と君が後来の禍福を示すも母と人懇く世の光景を看るも母と
 の中今上帝矢位と西國母僞と多し京師大母動亂し我歳がす鎌
 倉滅亡し帝少き母位母復るも是も亦全き莫なく四海母亂しと干戈
 止時たる後し君母地方母在すを災害母過るも危く人今天下事母
 きくちをやく東郊母走り常徳の間母在る難をさけり之故母草少
 く北堂の天壽を易く後より人彼所母おき玉り自良室を得る母女
 二人の孝子をさるも晩年富貴を得ん然も君母母一時不祥母と
 有は是禍母非き却く福を得るの絲原なり今日の翁の言を忘る母
 危母至る今一向を以る君母示さんと字紙を乞ふ母寫る其文曰

會本善書各德心之十一
 三十一

月老寓寸匕

東海得雙玉

遭禍棄鍾愛

一轉厭福祿

書終了又一塊の黄金を出し入る云ふ事をうて東列女は路費
 半地を止し居宅を價のき准借し其當ふ人這金さふ人を誑誘得
 ろる非も眷属を養へる爲山入る菜を取人間と交易せ金なま
 少も怪さるる多し今尚翁君の守護神とて後榮を守ふ座と
 言遂さるる一陣の風来り燭を吹消暗くする黑夜なる惠仲翁
 其燭を照し見ると只今茲有る翁と云く空しく一章の書と一塊の
 金との残るる附門外其声年へさるる戸を開けて寝る其火隠し
 稻荷山のすきをて飛去ぬ惠仲翁を見と感し想らく百歳を授け
 杭と能神通と云ふ事なり次や彼既五五歳を任まるといふ事
 神杭なり其身の病愈まると謝し人爲此報の是疑ふべき事なり
 曉天を待り母を見し宿し其も細やの語早く東列のすへさるる
 其も母も同意し暴日旅装を懸へて稻荷山に至り靈杭の廟に
 香を上げ叩願し云神杭の告も聞く今日母を推し東列へ去り
 預く哀愍納受あり客路思はる母子彼地に至り其を得也
 少刻祈念すまより京東道はけかる日を重ねて遠方旅路に
 以も秋の末なる双岸の菊花爛熳と咲乱る香氣馥郁と又
 佳景なる惠仲女志をて此處に休り眺望するも秋の月桂影
 ともや金鳥西山も没玉兔東海も浮出する事をも客店を索めん
 以もより道を急ぐやど金谷の驛に至りぬ這地はさるる客店
 有る事をも宿りて需得くゆそのも飲食は其の疲勞を休し早

睡みけりんとすまふも 這家此驛最一の興旺と見て 羨客を以て 甚鋭を
かりたるの漸く定鐘の九側旅も 馳まるとや 風候乱後の如く 家程難
くやうりすまふも 惠仲母子も 馳んとするも 紙門隔るる 婦人の悩苦め
を 聞へ老人の獨りも 薬を食ふ中 光景なるの 悩苦漸く高く 算られ
し母の頭を擡ぐ 夫を食く 再隠はて 急母惠仲を 呼起り 欲らく 紙門の
隣に 痛く有ると 母は 汝往く 茶を食へ 常言も 様々 行儀世を 情と云り
吾も 往く 待病せんと 母子均く 紙門を 搦き 見せ 齢廿歳を うち 女の 容貌
清らなり 若く 汝を 六十餘の 老漢子 抑搔せんと 居り 母の 進寄
往老漢子 対し 以て 奴家 母子 都より 東へ 卦不者 今 丹世 家
小宿 居る 愛の 餘り 母 悩むる を まく 母 忍び 辛五子 醫を 業し
すまふ 治を 施さ ちめん 爲 母 幸 亦 たり 幸 へ 突 入 せ たり 老漢子 之
喜ひ 感謝 云 小へ 負七 とい 者 母 悩者 主 人 也 名を 於 漫と
叫ぬ 素下 総の 産 たり 之 都 母 宮 侍 在 たり 此 石 古 街 たる 詩 世
母の 後 嗣 なる 且 伴ひ 往く 良 塔を 擇 亦 継 志 めん とい たり 夫の
外 母 幸 母 不 圖 時 邪 母 侵 且 如 此 若 人 車 を 弄 ず 夫 既 十 日
餘 四方の 医を 求 治を 需 且 更 母 驗 ば 君 願 しく 茶 餅を 以
て 濕 涙 じ 乞 ち 且 惠 仲 領 け 往 如 兒の 侍 母 奇 好 診 脈 右 茶 餅
汁を 飲 腹 け け 母 一 盃 茶 時 有 渾 身 汗 出 如 廁 四 五 度 天 眼の 九 側 女
兒 夢の 醒 きて 如 け け 氣 力 常 母 異 たり 夫 母 喜 び け 老 僕 母
昔 け け 奴 永 始 病 桑 母の 目 け け 一人の 漢子 来 たり 傍 を 離 して
誘ひ 行 人 たり 母 拒 け け 今 日 母 来 たり 要 行 人 頻 母 催 促 候
誘 引 郊 原 母 出 候 流 の 宿 け け 是 母 人 歩 渡 人 奴 家 母 母 母 母



匠
心
の
こ
ころ

惠仲客屋
同様の
病難を故

江戸
の
名
所
一
覧

江戸
の
名
所
一
覧

處暴子洋水蕩く漲まり彼漢子を流奴家も俱に流国に萬首ふ
 投すり幸せし岸に攀き上りて想へぬ此はくちまうと語を貞七毎
 く且故に且怪み深く惠仲の功を感賞し惠仲母子を請へて云主女病
 疾甚重しして既而泉下の鬼と成ぬべきを君の一貼の薬をく如此に金
 まもれをいすその其徳を報い奉らん為一杯を献せん酒肴を出し厚く密
 する既而酒半たるとき貞七が云主女が病甚奇怪しつるにぬ世女又初
 の如き病の有りや其病症の縁故を聞せり惠仲云く云是更奇怪しす
 足ふ只一邦を身裡に心を入れを責め故に鬼に龍を山谷に墮落を夢見
 叫是外に鬼の非ざるを庸醫みきり奇怪しつるに迂老の法を
 りて治を致す故に却て病を重しするに至る今小く一邦を驅の薬劑を
 投すり故に速に愈え喜得るに流を於漫も負せし此流に感庸

醫なりざるを感悟し只其徳を賞しり且説も惠仲平國に這婦人
 の為母兩日滞留する當時大雨なりは少刻も歇時なりあせがみ母の
 金谷嶋田の驛間なる大井川暴水増え流急水急流と激波影瀉々
 しく其津に光景をれ通路急に川を渉ふ事何ぞもぞぞぞ
 すなり空く日を送はる既而五日及ども尚晴間なりり這裡に強
 病全愈深く惠仲の恩を感謝し孰も彼人を看はぬ齡三十左側にて容
 貌潔く母もはるる其婉婉なりり此の裡に想はれは美貌に孝
 子を良人となしめんと女の身の福なりと頻に動き情をこころを
 是を批も素より謹厚の惠仲なりと聊肯ざりり母も這分野を
 猜し熟く思ふ母吾們東列子居をトん変を索せども彼地相識なく是を
 患る此於漫ちる東國の産し其う婉婉聽從の操はる也貞七

老實なる漢子をも今這於瓊々志小但々吾子と婚を做が彼した夫と
 索る當時ちも是西金の策儀なりと私小貞七と婚儀のふと謀り母
 も惠仲母伎婦を妻と做置と論「貞七は於漫母惠仲を良人と做りて説ふ
 素より迷惑を人なりと喜んぬるが以惠仲も母の只顧すむるを以て
 難く彼地母至りて居を索る母も利を遂母の命母従ひ忽事整正を
 度母時日十余日を徑へ天をじりて暗川水既母減し旅客の道路もあれを
 四人女喜び均く旅の宿を立ぬと總かじし急あり正茲此連日の雨々此
 的孝子貞婦を為め一條の赤繩を結る良縁ゆして彼神祝の示す老當す
 比と云は是れ何れも斯く四人の門の目もはしりて総列母至り居家を看小
 昔は縁故ありて見ゆもいふも友人も任じ荒果をりば惠仲神祝より受
 ける金もけ修理加日を擇びて婚を整えぬ然る後於漫姑母事と甚孝
 順も其心惠仲大母喜ひ夫妻十の恩恵を二兒を産長ハ男兒はく
 宗を五十態と叫肥頭大耳一身渾々大まき臂力有る其性貞烈なりと
 二ハ女兒はく名を負兒と叫生質十分の姿色有るこの名温順しと父母
 輩て甚孝なり如此良西兒を得るも是則東海得双玉の語も合り斯
 く后母天壽を以て汲ほく惠仲甚哀に喪に居りて孝を以て孰く過
 し莫より天下の光景を想着母當初神祝の示す毫髪も差す其ハ深く
 信厚く致己が持は田疇のち小本立ありける勝地ハ在聖瓶の廟を造置
 朝暮往々拜しける然る母近御忽然と時論すく「這神靈驗新し
 頼をかくはしと叶するもやじと暴母老若郡集する福母香錢山成
 做く惠仲不圖多錢を得るといへも露をりも是を己が育ちたる父の
 一御の禦寡孤獨に施し與へたるを餘するも近邑母及りて茲母共司進

一御の禦寡孤獨に施し與へたるを餘するも近邑母及りて茲母共司進

惠仲
の
屋敷
の
稲荷
の
群
の
園



會
大
正
三
月
二
日

奉
納
存
室
前

献

大
正
三
月
二
日

奉
納

納
奉
正

會
大
正
三
月
二
日

彼靈狐の神靈験しんれいごんきをき聞き小衛内の武運ぶげんをを祈いのらん為よ時とき這こ神廟かみ母は福ふくを
 是こ良よ師しなりとと敬まうびと徳とく亦また丸まるをを惠あま仲ちゆうがが弟子でしとと倣か一ひと專せん文ぶん道どうをを学まなぶま
 母は惠あま仲ちゆうもも又また兵へい司しをを老らう曾そう母ぼとと武ぶ長ちやうをを識しるり五ご十じゆ熊くまをを以もてて倣かぶぶ
 武ぶ枝しをを倣かぶぶしし豆まめ小こ子こをを易やすてて其その教かみもも

春宵 繪本壁落穂巻之を畢
 奇譚

